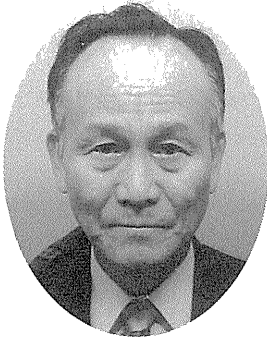


## ずいそう



## クーデターに遭遇した話

磯部 金治

1990年2月25日、月曜日の早朝、突然運転手からクーデターが始まったと言う知らせで目を覚ました。彼の第一報は、クーデターの成功を期待し、確信する上ずった声であった。彼は、マルコス信奉者だった。私が、JICA プロジェクトの専門家として、1988年3月31日より2年間のフィリピン生活を送っていた後半の出来事だった。

JICAの無償援助プログラムは、フィリピンの通商産業省翼下の建設人材養成センターが実施する技能者のリーダー養成を支援し、指導する事業であった。リーダー研修は、建設機械の運転・整備、鉄筋・鉄骨組立、ブロック積工、型枠工、溶接工、工事電気設備工の6コースで、私はプログラムリーダーとしてセンターの施設、資機材、教材等を供与し、日本から専門家を招請して、センターに所属するフィリピン職員に日本の技術を移転すると同時に、研修マネージメント・研修技法のアドバイスを実施する役目であった。

クーデターは前夜から動きがあり、数ヶ所の基地の軍人が呼応した。週末で、ただ一人マンションに残っていた時のクーデター勃発のニュースで、無意識のうちに近くの百貨店“ルスタン”へ食料品の調達に走った。重い食品類をぶらさげて、ルスタンを出ると同時に出入り口のシャッターが下ろされ、間一髪で食料の確保ができた。これが、その後に発生する危険な事態に対処する余裕を与えてくれた。私の住んだマンションは22階建てのツインビルで、各棟のフロアは4区画の居住区があり、フィリピンの富裕層や各国の国際業務に携わっている人々が居住していた。この21階の広い部屋で、ただ1人5日間の籠城を続ける羽目となった。

買い物後、21階のベランダより静かになった街や街路を眺めていると、約20人の銃を持った反乱軍がルスタンを始め周辺のホテル、スーパー、高層住宅などに進入し始めた。恐怖感で、すぐ部屋に引きこもった。我々のマンションにも20人を越える反乱軍が進駐していた事が後でわかった。マカティエ地区だけでもかなりの数の反乱軍が滞在していたことになる。

奇妙な事に、毎日必ず1~2時間の停電を繰り返していたマニラの電気が、クーデター期間中

一回の停電も無く、TV情報、クーラーの使用に支障無く生活出来た事は幸이었다。電気、水、電話、食料と当面の生活に必要な物は確保出来そうだったが、安全上は一抹の不安が残った。ここから数キロ離れた軍の司令部を反乱軍のヘリコプター2機が執拗に攻撃し破壊する所を部屋から目撃し、こちらも攻撃を受ける不安を覚えた。夜になると、反乱軍の移動か、威嚇しているのか、各所で砲撃音がし、闇夜の中を赤い光跡を引いて真っ直ぐに飛び交う弾丸の全てが此方に飛んで来るような錯覚に襲われる。時々何処かで砲撃の音がすると、それに合わせて各地で一斉射撃が始まる。丁度、間近で花火大会が何日も続く様だった。

メインルームを隔てるコンクリートの厚い壁を盾にして窓際に寄って外を眺めていると、眼前の対向するタワーの21階メインルームを砲弾が直撃し、約10m<sup>2</sup>もある大きな窓と窓枠の全てが、物凄い爆発音・爆風、白煙と共に一瞬のうちに無くなってしまった。怖くなって、部屋の中心部にある大理石で固められたメインルームのバス・トイレと洗面所に避難した。そこは、やっと布団が敷けるスペースがあり、必要な食料と生活道具を持ち込んで籠城する事となった。砲声が始まるとそこに逃げ込み、止むとメインルームの電話で連絡を取ったり、TVを見たり、ワープロにクーデターの記録をする生活が続いた。後日、別の部屋には2枚のドアを突き抜け、中央にある別のトイレの壁にめり込んだ2個の被弾跡が見つかった。

数日が経過し、当面の生活が確保されて外からの情報も入手出来る様になると、人間は恐怖心が薄らぐのか気分的に落ち着いて来た。毎日砲撃音が続いているにも関わらず、気持ちも緩みだし、好奇心も手伝って絶対行かなかった玄関に近づき扉を開けて見ると、22階へ上る階段に銃を持った反乱軍人がこちらに顔を向けた。大急ぎで扉を閉め、リビング及びメインルームのドアをロックし、再び洗面所に引きこもった。どうも我々に関心があるのではなく、23階の屋上に大砲が設置してあって、それを監視する歩哨のようだった。そのため、何処かで砲声があると反応するように、近くで物凄い砲撃音が聞こえるのだった。

5日間が経過し、アキノ政権の転覆もマラカニアン宮殿の占領も出来ず、反乱軍兵士も倦怠して来た様だった。週末が近づき和平の話し合いが進展し、殆ど死傷者の無いクーデターのあっけない終局となった。反乱軍は大した罰も受けず、凱旋將軍のように基地に帰って行った。その後、首謀者のG.ホナサン大佐は逮捕されたが逃げ出してしまったと聞く。